

論 文 要 旨

Preoperative biopsy does not affect postoperative outcomes of resectable non-small cell lung cancer

(切除可能な非小細胞肺癌に対する術前生検は術後の結果に影響を与えない)

関西医科大学呼吸器外科学講座
(指導：村川 知弘 教授)

谷 口 洋 平

【はじめに】

肺癌の術前診断の方法として主に気管支鏡下生検とCTガイド下生検がある。気管支鏡下生検やCTガイド下生検は肺構造を破壊し、癌細胞を気道、血管内、胸腔に散布し、播種させる可能性がある。その為、これらの手技が術後の結果に影響を与える可能性がある。私たちは術前に生検で診断がついた群と肺切除を行い診断がついた群の生存結果を比較した。

【研究方法】

これは単施設の後向き解析である。2006年1月から2012年12月まで手術を受けたcTanyN0M0患者を対象に調べられた。気管支鏡検査、CTガイド下生検、肺切除で診断のついた患者の全生存率、無再発生存率を単変量、多変量Cox比例ハザードモデルを用いて比較した。またステップワイズ法を用いた。

【結果】

気管支鏡下生検、CTガイド下生検で診断がついた群は肺切除で診断がついた群（術中もしくは術後に診断がついた群）より腫瘍径が大きくより進行癌であった。粗分析では、気管支鏡下生検、CTガイド下生検で診断がついた群は肺切除で診断がついた群と比べ、胸腔内播種の確立が高く、予後が悪かった。多変量解析では、診断法で胸腔内播種、全生存率、無再発生存率で独立した危険因子は認めなかった。

【考察】

このコホート研究では、術前診断は再発リスクと予後に影響を与えなかった。したがって、必要と考えられる場合は、術前診断は推奨される。